

令和4年度
興南高等学校
入学試験問題

前期

国語

令和4年1月15日(土)実施 50分/100点満点

受験上の注意

1. 試験開始の合図があるまで、この問題用紙は開かないようにして下さい。
解答用紙は別になっています。
2. 問題は【一】～【三】まで3題あります。
3. 試験時間は50分です。
4. 解答は解答用紙の所定のところに記入して下さい。
5. 解答は楷書で丁寧に記入して下さい。
6. 解答用紙には、受験番号、中学校名、氏名を必ず記入して下さい。
7. 試験終了後、問題用紙は持ち帰って下さい。

【一】次の文章を読み、後の問いに答えよ。答えは解答用紙に楷書で丁寧に記入せよ。なお、指示された表記方法以外で解答した場合は採点されないため注意せよ。

1 安住していた世界、すべてが自明だった世界ではなく、新しい世界で生きなければならなくなったことを自覚し始めた時から、人は世界に対しても自己に対しても距離を置いて生きることになります。

2 三木は「エクセントリシティ」という言葉を使っています（「シエスタフの不安について」）。エクセントリシティ(eccentricity)は「^aジョウキを逸^いしていること」というようなネガティブな意味で使われますが、三木はこれを「離心性」と訳しています。「離心」は「中〈心〉から〈離〉れる」という意味です。

3 ^①エクセントリックに生きるというのは、自然に定められている中心から離れて、「人間が主體的にその存在論的^{*2}中心ともいうべきものを定立しなければならぬ」（前掲論文）という意味です。中心は自然に定められているのではなく、定められていると想っていますというのが本当です。

4 中心が自明のものとして与えられていると考える人は、常識的な価値観に何ら疑問を感じませんし、今の生き方でいいのかというような疑問を持つこともありませんし、^{*3}先にも見たように、明日という日がくるのは当然であり、先の人生が見えているように思っています。

5 常識的な価値観に何ら疑問を感じていない間は、^②エクセントリックに生きようとは思わないでしょうし、そうする必要も感じないでしょう。まわりの社会とも調和して生きることができます。しかし、何かのきっかけがあって人生が無の上に立っていることを知ると、人生の中心が自明のものとして与えられていないことを知ることになります。

6 常識的な価値観とは、**X** 成功者として生きることによって価値があると考えることです。子どもの頃から一生懸命勉強するのは、

有名大学に入るためであり、一流企業に就職するためです。

7 子どもが勉強することに疑問を持つことがあっても、大人は「今はとにかくガマンして勉強しなさい、大学に入学さえすれば後は楽ができるから」と説得します。ところが、目指す大学に合格すると、大人がいつていたことが本当ではなかったことに気づきます。当然、大学に入っても勉強しなければなりませんし、働き始めたらいよいよ勉強しなければなりません。今を犠牲にして未来のために頑張ったのに自分が思い描いていた未来ではなかったことに気づいた若い人は多いでしょう。

8 ⑧ 人生は決められたレールの上を動くようなものではなく、自分で形成しなければなりません。これを知るまでは人生は安定していたでしょう。しかし、先のことは何一つ決まっているわけではなく、自分が人生を形成しなければならぬという現実を知ると不安になります。この不安は人生には決められたレールがないことに気づいた時に起きる感情で、むしろ、この不安を感じない人は人生の先が見えると思ひ込んでいるのです。レールがないのであれば常識的な生き方をする必要はなく、誰かに人生を決められることも必要ではありません。人生はエクセントリックなものにならないわけにいきません。

9 三木は次のようにいいます。

10 「エクセントリックになり得ることが人間の特徴であり、それ故にこそ古来あのようにしばしば中庸ちゅうようということ、ほどほどにということが日常性の道徳として力説されなければならなかったのである」(前掲論文)

11 「ほどほどに」生きるのではなく、エクセントリックに生きていけない理由はありません。成功を収めた人が若くして現役を引退すると、もつたないというようなことをいうような人がいます。本当は、エクセントリックな生き方をする人がいれば羨ましいのです。それなら、自分も常識にシバdられずに生きればいいものをそうする勇氣はないのです。

12 一度決めた人生を最後まで全まじうする人は立派だと思います。しかし、何度も人生の進路を変えていけないわけではありません。

一度きりの人生なのだから、自分の好きに生きていいのであり、人の期待を満たすために生きていのではないからです。

13 **Y** 自分ではエクセントリックな人生を生きようとはしないで、自分はできない生き方をする人がいればその人の人生の行く手を阻さまたもうとします。

14 三木は次のトロイメル(夢見る人)について、次のようにいっています。

15 『世なれた利口な人達は親切そうに私に度々云いってくれた、『君はトロイメルだ。その夢は必ず絶望おに於て破れるものだから、もっと現実的になり給え。』私は年も若いし経験も貧しい。けれど私の心は次のように私に答えさせる。『私は何も知りません。ただ私は純粋な心はいつでも夢みるものだと思っています』(『語られざる哲学』)

16 「世なれた利口な人達」は三木に現実的であれ、エクセントリックであってはいけないといったのです。しかし、純粋な心を持つている人の生き方はエクセントリックなものにならないわけにいきません。

17 問題は、トロイメルも歳を重ねるとすっかり現実的になってしまい、かつての自分のようにエクセントリックな人生を生きようとする人の行く手を遮さまたろうとすることです。現実的になった人は、人生を正しく見られるようになったのではありません。ただ、エクセントリックにしか生きられない人生なのに、夢をしぼませ安全な人生があるという思いこみの中に逃げてしまっただけなのです。

18 エクセントリックな、人とは違った生き方を選ぶ人自身も不安になります。人が決めたルールの上を生きれば安心であり、もしも行き詰まるようなことがあっても、人に責任を転嫁てんかすることができりますが、反対に、自分で人生を選べば責任はすべて自分に降りかかってくるからです。

19 しかし、エクセントリックに生きるというのは、中心から離れて「人間が主体的にその存在論的中心ともいうべきものを定立し

なければならぬということ、またこれを定立する自由を有する」(前掲論文)ということです。

20^{*4} 先に見たように、今の時代、アノニム(無名)、アモルフ(無定形)の人、つまり、個性、性格がない、一般的な人として生きていく人が多いように見えます。同じ常識的な価値観に従って生きる人は、エクセントリックには生きていないのです。エクセントリックな生き方をするのは、個性を取り戻すためです。

【岸見一郎 『不安の哲学』 祥伝社 ※問題作成の都合上、一部改変】

【語注】

*1 三木：哲学者の三木清。^{まよし} *2 存在論：あらゆるものが存在する意味や根拠を研究する学問。

*3 先にも見たように：「いつか自分も死ぬだろうと思っても、他人事ではない人はいます」と筆者は前述している。

*4 先に見たように：ここ以前でも筆者はアノニムとアモルフについて言及してした。

問一 二重傍線部の a と f の漢字の読みをひらがなで書き、カタカナを漢字に直せ。

- | | | | | | |
|---|-----------------|---|-----------------|---|---------------|
| a | ジヨウキを逸している | b | とにかくガマンして勉強しなさい | c | それ故にこそ古来あのように |
| d | 常識にシバられずに生きればいい | e | 行く手を阻もう | f | 責任を転嫁する |

問二 傍線部①「エクセントリックに生きる」とはどういうことか。筆者の主張として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア 常識的な生き方を選択せず、世間や他者の期待から距離をおき、孤立しても自分の人生に責任をもって生きること。
- イ 人生は理屈抜きに存在することを根拠に、他者と異なる故の不安を抱えながらも、人とは異なる生き方を貫くこと。
- ウ 特定の価値観にとらわれず、積極的に中庸をこころがけ、自由な意志を持って人生を定立するような生き方のこと。
- エ 社会と調和することを意識し、着実に安定した生き方を第一に考え、一度決めた生き方を変えないように生きること。

問三 傍線部②「エクセントリックに生きようとは思わない」とあるが、そのような人たちの生き方の特徴として**適当でないもの**を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 自分の住む世界を把握できていると考えているため、日常が安定的に繰り返される見通しをもって生きている。

イ 自己の理解する世界と他者の世界が重なっているため、自分の世界の中心が他の世界の中心でもあると考えてしまう。

ウ 自分の人生が無の上立っていることに自覚的なため、他者と協力して不確実性を排していくため和を大切にしている。

エ 常識的な価値観に沿った定型的な生き方を選択し、一般的な生き方を志向するあまり個性をなくしてしまっている。

問四

X

・

Y

に当てはまる語として最も適当なものを次のア～オから選び、それぞれ記号で答えよ。

ア そして イ くわえて ウ 例えば エ なぜなら オ しかし

問五 傍線部③「人生は決められたレールの上を動くようなものではなく、自分で形成しなければなりません」について以下の問いに答えよ。

1 「人生は決められたレールの上を動くような」には付属語はいくつ含まれているか、**漢数字のみ**で答えよ。

2 「ものではなく」にみられる文の成分の説明として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 主語―述語の関係 イ 修飾語―被修飾語の関係 ウ 補助―被補助の関係 エ 並立の関係

3 「自分で形成しなければなりません」に活用のある語はいくつ含まれているか、**漢数字のみ**で答えよ。

4 ここに用いられている敬語の種類と敬意の対象の説明として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 尊敬語―三木へ イ 謙讓語―大人へ ウ 丁重語―子どもへ エ 丁寧語―読者へ

問六 本文の内容と表現に関する説明として適当でないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 形式段落8の「思い込んでいる」や17にみえる「思いこみ」からは、他人の決めた人生とは一線を画し、ひとりよがり生きるトロイメルに対しての強い批判の意思がうかがえる。

イ 形式段落8の「何一つくない」や17の「すっかりくなって(しまい)」では、それぞれ呼応の副詞を用いて人生が本来エクセントリックである点やトロイメルの問題点を強調している。

ウ 形式段落11の「生きていけない理由はありません」に見られる二重否定や、16で三木のいうトロイメルと異なるトロイメルとの対比を用い、人と異なる生き方を強く肯定している。

エ 形式段落15の「世なれた利口な人達」や「親切そうに」は、批判的な内容にあえて肯定的な表現を用いることで、三木のいうトロイメルを批判する者へ痛烈な皮肉を述べている。

問七 本文の要旨と構成・展開に関する説明として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 筆者は冒頭でエクセントリックに生きることの正当性を三木の論文を引用しながら説明し、これとは異なる生き方が社会的な地位を築いている現状に対し再度三木の論文を援用して批判を続け、一貫して三木の説をなぞりながら人が本来エクセントリックにしか生きられない生き物であると述べている。

イ 筆者は前半でエクセントリックに生きるマイノリティと既存の価値によって生きるマジョリティの対照的な生き方を説明し、中盤ではマジョリティが社会の中心となりマイノリティの権利を無自覚的に侵害している状況に憂慮を示し、現代社会で個人的に生きることは一層難しくなっていると述べている。

ウ 筆者は冒頭で自己や社会と距離を置いた個性的な生き方とは逆に調和を重んじて個性を失った生き方について説明し、一見正しく生きているように見える生き方が是とされ本来正しく生きているが非とされる逆説的な状況を指摘したうえで、生き方のねじれた状況を改めるべきだと述べている。

エ 筆者は前半でエクセントリックに生きる人とそうでない人の違いについて具体例を交え対比的に説明し、エクセントリックに生きる必然性を示しながらもその生き方が困難な理由を述べ、最後に喪失した個性を取り戻すための処方箋としてエクセントリックな生き方をすべきことを述べている。

【二】次の文章を読み、後の問いに答えよ。答えは解答题紙に楷書で丁寧^{ななこ}に記入せよ。なお、指示された表記方法以外で解答した場合は採点されないため注意せよ。

高校生の七子^{ななこ}が母と二人で暮らす家に、小学生で異母兄弟^{ななこ}の弟、七生^{ななこ}がやって来た。七子は我が家と特に交流もない亡き父の愛人の子どもを引き取った母の奇特で太っ腹な行為に驚いていた。そんなある日、母が亡くなり、七子にとって母の死が漠然としたまま二か月がたち、ようやく落ち着いていた日々に戻った秋のある夜、深夜になっても眠れない七子は、その様子を心配した七生に誘われ真夜中の町を散歩することになった。

時々車とすれ違ったけど、それ以外は動くものとは出会わなかった。二人のつかかけの音だけが規則正しく響く。こんなに夜遅く歩いたことなどなかった。思い描いていたよりずっと夜^Aの町は静かだ。昼間の趣を全く残さない^A風^{ななこ}いだ。夜は私たちをどんどん進ませてくれる。住宅地に入ってしまったのか、音も光も薄れていった。

あてもなく歩くなんて、帰りの面倒くささを考えたらうんざりだけど、夜は私の中から煩^{わづら}わしいという感情を消してくれた。目的地や帰る時間や進む距離とかいうものをいっさい考えずに動くのは心地よかった。そういう規制のなさは想像以上に私を解き放つてくれた。

七生も私もあまり口をきかなかった。夜のしんとした空気が声を出すことをためらわせたせいもあるし、静かな夜の気配を感じていたかった。何も話さずただ歩いているだけなのに、楽しかった。七生が楽しいのもわかったし、私が楽しいと思っっているのも七生に伝わっていた。

周りの景色に見慣れたものがなくなった。見ず知らずの場所に来てしまっている。

私たちは同時に速度をゆるめると顔を見合わせた。

「どの辺だろう」

「もう、駅は越えてるよね」

「さあ。通らなかったけど」

私たちは小声でつぶやいた。ささやき声で十分に伝わる。

「どれくらい進んじやっているのかなあ」

三十分以上歩いただろうか。七生の言うとおりまっすぐ行って、右、左とやみくもに歩いてきたし、暗さでいつもの町と違って見えるから、どこに進んでいるのか、どこを通ってきたのかさっぱりわからなかった。早足で歩いたからずいぶん進んでいるのは確かだ。

「だいぶ歩いたよね」

「休憩なしだもん」

「疲れた？」

七生に訊かれて私は首を横に振った。

私の足は疲れを全然感じてなかった。まだまだ進めそうな気がした。どこまででも何時間でも歩けそうな気がした。^①夜は不思議だ。日頃使わない力や感情を動かしてくれる。

「あ」

七生が小さな声をあげた。

「何？」

私が尋ねると、七生がそつと顎^{あご}で前を示した。^②野犬だ。大きな体をした犬が二匹、無気味にゆったりと目の前を動いている。

「うそ、やだ」

私の足は硬くなった。動物が苦手なのだ。苦手じゃなくなたって、夜中にあんな野犬を見ればびびる。

「大丈夫。知らん顔して歩けば、何もしてこないよ」

「でも、こっち見てる」

犬は私たちに気づいたらしく、体をこちらのほうへ向けた。

「さあ、行こう」

七生はそう言ったけど、私は怖くて動けなかった。

「無理だよ」

「じゃ、引き返そう」

「もう遅いよ。こっちに来てる」

「どうする？」

七生は困った顔を私に向けた。私はとにかく首を振った。引き返しても進んでも、私たちが動けば犬が付いてくるのは明らかだ。「ここについても仕方ないから、行こう」

七生はそう言うと、私の手を取ってゆっくり歩き始めた。私たちは犬から少しでも離れるように道の端を通って前へ進んだ。犬は私たちをやりすごすと、同じゆっくりしたスピードで窺うかがうように付いてくる。

「付いてきてるよ」

「振り向いちゃだめだよ」

七生は犬に聞かれないように小さな声で言った。そして、前より強く私の手を握った。

「わかった」

私は素直に答えた。すぐ後ろに犬の気配を感じながら、七生の背中だけを見て歩いた。なんだか照れる。手を握られていることも、犬ごときにびびっていることも、夜のせいかいつもと調子の違う自分にも。

犬は怖い。鯖さばと鳩はと以上に苦手だ。でも、いつもの私ならこんな風にはびびらない。一人で何食くわぬ顔かほして強気にやり過ごす。

母さんの口癖「七子が強いから助かる」。周りの私に対する評価は小学生の頃から変わらず「氣丈夫」「強い」。確かにそうだ。無理しているわけでもなく、強がつているわけでもなく、私は強い。父さんが突然死んだ時も、三日くらい泣いて、何事もなかったようにけろりと元に戻った。学校生活の悩みのメインである友人関係にも、一切苦しまない。小さい頃から一人で夜を過ごすことも平気だったし、細かいことはあつさり流してきた。恐怖や不安を感じとる神経が鈍いし、それを一人で対処する能力にはたけている。③ だけど、こういうのもいい。

七生は程よい速度でどんどん私を引っ張っていく。時々指先がかすかに動くのがくすぐりたい。誰かに手を引かれて歩くなんて、どれくらいぶりだろう。もちろん、^{*}野沢と手をつなぐことはある。でも、それとは全然違う。こんな風に手を引かれることはない。大人になって意思を持ち始めると、手は引かれるものじゃなくつなぐものになっていた。

七生の手の中で、私は何もかもが温かくなっていくのを感じた。さっきまであんなに恐れを感じていたのに、すっかり気楽になっていた。たぶん、今、真後ろにライオンがいたとしても、七生に手を引かれていけば、大丈夫だと思える。「頼る」というのはこんなにも幸せな感覚を持つものだったのだろうか。何も自分で決めなくていい、ただ、手の引っ張られるほうに足を進めればいい。すべてを投げ出して無防備でいられる安心感。心の中で何かがすんと落ちてしまうような心地よさ。私はすべてを七生の手にゆだねていた。ただ、私が心を任せている手は、私の手より少し小さい。

犬の気配も、私の恐怖心もいつの間にかすっかり遠のいていた。

「まだ？」

七生が言った。

「え？」

「犬、まだ来てる？」

「そんなのわかんない。だって七生、後ろ見ちゃだめって言ったじゃない」

私が言うと、七生は私の手を握ったまま振り返った。

「大丈夫みたい。あいつらのテリトリー＊から出たみたいだから、もう来ないよ」

私も七生と同じように後ろを振り返った。私たちの背後には、犬どころか、何一つ心配がなかった。七生の手を離して、大きく息をすると、私は突然笑いがこみ上げてきた。

「どうしたの？」

「なんだか犬ごときで、びびってたって思うとき」

「夜だからだよ。夜になるとなんでもいつも以上に怖く感じちゃうから」

七生が私を慰めるように言った。

「ふふ。そうだね」

わけもなく、楽しくなってしまうていた、そう、七生の言うとおりに、夜のせいだ。

私の笑い声はなかなか収まらなかった。

「何がおかしいの？」

「わかんないけど、止まらないんだもん」

不可解な顔をしている七生の横で、私は声をあげて笑った。

何も無い誰もいない夜の空間。もちろん、立ち並んでいる家々の中に人はいるのだろうけど、きっと今、私と七生だけが目を開けている。どこまで行っても私たち以外に目を覚ましている人はいないだろう。そんなことが、おかしくて、そして悲しかった。

「ななちゃん」

「何？」

「どうして泣いてるの？」

不思議なことに、笑い声が出なくなった私の体からは、涙がこぼれていた。笑っていた私は、一瞬にして泣き始めていた。本当の涙は、時も場所も選ばず襲ってくる。どうして今、涙が出るのだろう。私の涙の勢いはどんどん加速した。

「ななちゃん」

七生は次々変わる私の感情に、おろおろしていた。その様子さえもおかしくて悲しくて、とても泣けた、

「ななちゃんってば」

どうしていいのかわからないのだろう。七生はただただ私の名前を呼んだ。

「ねえ、ななちゃん」

いい名前かどうかは別にして、私の名前は心地よい音を持っている。七生が呼ぶと、それが明確になる。静まり返った道の真ん中で、私の名前はびっくりするくらいすてきに響いた。

④「今わかつちやった」

私は涙の合間を縫って、声を出した。

「何が？」

七生が訊いた。

「すぐくわかつちやったの」

ずっと不思議だった。いまいわからなかった。いくら人がいいといっても、愛人の子どもをわざわざ引き取るだろうか。今まで何の関わりもなかった七生を、母さんは半ば強引に引き取った。男の子が欲しかったのよ。そんなの、まるで違う。身寄りのない七生がかわいそうだったから。まさか。七生はどこでだって生きていける。

自分の死を予期していた母さんが七生を引き受けた理由は、ただひとつだ。

「ななちゃん。疲れちゃったの？」

「そうじゃないよ」

「もう帰ろうか？」

七生の手がそっと私の腕に触れた。

「七生は優しくしてくれるんだね」

私がそう言うと、少し間を置いてから七生はかすかに微笑んだ。

「だって、ななちゃんも僕と血が繋がってるたつた一人の人だもん」

「七生、自分のお母さんのこと忘れてるよ」

私は笑った。七生も少し笑った。

「ほんとか。でも、お母さんが僕のそばにいてくれるのは、血が繋がっているからじゃないよ。一人じゃられない人だから。寂しがりやなんだ、とても。だから、僕をそばに置きたがるだけだよ。恋人がいる時は、僕のことなんて忘れてるもん。ななちゃんは、ちよつとだけだけど、血が繋がってるからでしょ？僕と一緒にいてくれるのは」

そうなのだろうか。それはよくわからない。どうして七生と一緒にいるのか、一緒にいたいと思うのか、理由はわからない。でも、母さんが死んだ今、私にとって繋がりがあるのは七生だけだ。

誰とも繋がっていないのは寂しい。恋や愛や友情は、美しかったり強かったりするけれど、いつ切れたっておかしくない繋がりが。母さんは私を一人にはしなかった。遠く離れていても、憎しみ合っても、お互いの存在すら知らなかったとしても、私と七生は繋がっている。母さんは私に^{はかな}儂さのない繋がりを残してくれた。

涙も笑いも出なくなった体で、空を見上げた。あれほど深く見えた夜空は、ほんのり白んできている。もうすぐ夜が明けるのだ。

【瀬尾まいこ】『T's blood』新潮文庫 ※問題作成の都合上、一部改変

【語注】*1 野沢：七子の彼氏。

*2 テリトリー：動物のなわばりのこと。

問一 二重傍線部A～Dの本文中における意味として最も適当なものを次のア～エから選び、それぞれ記号で答えよ。

- | | | | | | | | | | |
|---|---------|---|-------|---|-------|---|---------|---|---------|
| A | 風いだ | ア | はりつめた | イ | はかどった | ウ | はばかりた | エ | おだやかな |
| B | やみくもに | ア | 分別なく | イ | あきらめて | ウ | 困惑して | エ | 意固地に |
| C | 何食わぬ顔して | ア | こだわって | イ | 意に介せず | ウ | 鼻っばしの強い | エ | 歯牙にもかけず |
| D | おろおろして | ア | 泣きそう | イ | 何もできず | ウ | うろたえて | エ | おののいて |

問二 傍線部①「夜は不思議だ」とあるが、七子がそう感じる理由として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア 夜の静かな空間は、二人の言動の単調さを意識させ、散歩を煩わしく思う気持ちを高めて疲れさせたから。
- イ 夜の真つ暗な空間は、二人の五感をさえぎり、眠りの妨げであった二人のわだかまりや緊張をほぐしたから。
- ウ 夜のしんとした空間は、会話をばからせ、散歩にまつわる共感を生み普段と異なる変化をもたらしたから。
- エ 夜の不気味な空間は、後に二人を襲う事件を想起させ、二人きりの心細さを高めて強く絆を感じさせたから。

問三 傍線部②「野犬」の本文における役割を説明したものとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア 夜中の野犬が七子に緊張感をもたらしたことで、動物でさえも苦手な自分の弱さや、他に誰も頼ることのできなくなった七生の恵まれない境遇に同情することのきっかけをつくっている。
- イ 大きな野犬が七子を驚かせたことで、普段は強気を装う臆病な内面が現れたことで七生の勇氣と機転を頼もしく思い、家族は支え合って生きていくのだと気づくきっかけをつくっている。
- ウ 七子に不気味さと死を意識させることで、状況に冷静に対処する七生と対照的な自分の生き方について考えさせ、互いの長短を補い合って生きる必要性に気づくきっかけをつくっている。
- エ 七子に恐怖や不安感を与えることで、自他共に認める強い自分と同時に弱い自分もいることを素直に受け入れさせ、七子を思い遣る七生の存在を意識しはじめるきっかけをつくっている。

問四 傍線部③「だけど、こういうのもいい」から、傍線部④「今わかつちやった」に至るまでの七子についての説明として、最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 野沢との恋愛とは異なり家族の七生との関係の確かさを感じ、ささいなことも二人だけの秘密として共有することで楽しみや悲しみを思い出として生きていくことができると分かり、名前に込められた二人の特別な関係に思いをはせている。

イ 七生と窮地を共にしたことで野沢とは色合いの異なる信頼感を覚え、恐怖心や緊張から解放された気持ちなどの共感が次第に高まってき、名前を呼ばれたことをきっかけに自身の頼りなげな生活に対する隠していた悲しみがこみ上げている。

ウ 自分には七生のように無条件で頼れる存在がいることに気づき、生活の中で自分が無意識に緊張させていた糸が緩み楽しさや悲しみの感情が入り混じり制御できなかったが、次第に七生と自分とのつながりによるものだと気づき始めている。

エ 二人暮らしや母の死を経て気丈に振る舞っていたが、七生の優しさに触れたことで久しぶりに様々な自分の感情に気付くことのできる余裕と冷静さを取り戻し、不意にもらした感情で混乱させてしまった七生を安心させようと努めている。

問五 傍線部④「今わかつちやった」とあるが、七子が「分かったこと」の説明として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 自分の名前と同じ響きの七生に名前を呼ばれたことで、音が共鳴するイメージから、二人の関係も理屈抜きに通じあえるものだと気づいたということ。

イ 母親が異なるなら違う名前をつけそうだが、共通の字や音を用いたのは、言霊によって縁が切れないよう配慮されたものだったと気づいたということ。

ウ わざわざ愛人の子どもを引き取った母親の考えは、自分の死後血の繋がった確かな繋がりを残し、七子に寂しい思いをさせまいとしたものだったということ。

エ 懐の広い母親は、寂しさを埋めるために恋人や子どもを近くにおく愛人にかわり、自分や七生に切れない確かなつながりの大切さを伝えたかったということ。

問六 傍線部⑤「あれほど深く見えた夜空は、ほんのり白んできています。もうすぐ夜が明けるのだ」の描写からはどのようなことが分かるか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 七子は七生との確かなつながりや母の遺した思いに気づいたことで、長年抱えていた家族とのつながりにまつわる苦悩や母の死を経ての苦しみから次第に解放されていく可能性を示している。

イ 七子は家族とのしがらみや母の死によって悲しみの底にいたが、暗闇を照らし導いてくれるような七生の人柄にふれ、過去と完全に決別し前向きに生きることができるようになったことが分かる。

ウ 眠れず野犬にも追われた夜は長く感じられたが、小さいながらに想い遣り溢れる七生の手引かれ心が満たされ、気話まりな人付き合いを前向きに考えられるようになったことを示している。

エ 行くあても分からず終わりの見えない散歩に、七子は家族との不確かな繋がりに対する不安や引きずっている母の死を重ねていたが、過ぎていった時間が問題を解決してくれたことが分かる。

問七 本文中にみられる表現の特徴や作品の工夫についての説明として**適当でないもの**をア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 場面を夜に設定している意図と同様に、散歩の向かう先を「見知らぬ土地」と設定し、登場人物を普段と異なる環境下におくことで、平素は意識されない登場人物の心情や関係に焦点を当てている。

イ 野犬が登場していなくなる場面までの七子と七生の短い会話は、七子の不安や緊張する様子を表現するだけでなく、七子に比べ心中表現が少ないこととあわせ、七生の子どもらしさを強調している。

ウ 地の文は七子の視点と語りによって進み、端的な口語表現が多用されているため、七子の心情に共感しやすくなっているだけでなく、七子の複雑な心情や推移の理解が深まることにつながっている。

エ 七子の感情がせわしく変わる場面における人物描写は、二人の確かな繋がりを自明のものとして意識しない七生の様子が、七生との関わりを通じて感動的に自覚されていく七子の印象を強めている。

【三】次のⅠ・Ⅱの文章を読んで後の問いに答えよ。答えは解信用紙に楷書で丁寧に記入せよ。なお、指示された解答方法(表記)以外で記入した場合は採点されないため注意せよ。

Ⅰ

小児の時は、必ずあしきくせ、あしきならはし^aなどあるを、みづからあしき事と知らば、あらためて行なふべからず。又^{*1}かかるあしき事を、人のいさめに^{*2}あひ、戒めらるれば、よろこんで早くあらため、後年まで、ながくその事をなすべからず。ひと度のいさめたる事は、ながく心にとどめて、忘るべからず。人のいさめを受けながら、あらためず、^{*3}やがてわするは、守^{まもり}なしと云^いふべし。守なき人は、よき人となり^{*4}がたし。いはんや、人のいさめをきらひ、いかりうらむる人は、^①さらなり。人のいさめをきかば、悦^{よろこ}んで受^うくべし。必ずいかりそむくべからず。いさめをききて、もしよろこんで受くる人は、善人なり、よく家^Aをたもつ。いさめをきらひ、ふせぐ人は、必ず家をやぶる。これ善悪のわかるる所なり。いさむる、理^{*5}たがひたりとも、^②そむきて、あらそふべからず。いさめをききて怒れば、重ねてその人、いさめをいはず。凡^{*6}そいさめをきくは、大いに身の益なり。いさめをききて、悦んで受け、わが過^{あやま}りを改むるは、^③善、これより大なるはなし。人の悪事多けれど、いさめをきらふは、悪のいと大なるなり。わが身のあしき事をしらせ、あやまちをいさむる人は、^bたふとみ、したしむべし。^④わづかなるくひものなど贈^{*7}るをだに、悦ぶならひなり。いはんや、いさめを云ふ人は、甚^{はなは}だ悦びたふとぶべし。

【語注】

【『和俗童子訓』※問題作成の都合上、一部改変】

- *1 かかる…このような。
- *2 いさめ…^{かんげん}諫言、忠告。
- *3 やがて…すぐに。
- *4 いはんや…ましてや。
- *5 理…ことわり、道理。
- *6 凡そ…一般的に、おしなべて。
- *7 だに……でさえ。

貞観元年、太宗謂侍臣曰、「正主、任邪臣、

不能致理。正臣、事邪主、亦不能致理。惟君

臣相遇、有同魚水、則海内可安。朕雖不明、

幸諸公數相匡救、冀憑直言、鯁議致天下

太平。

【語注】

*1 貞観元年：唐の太宗が即位した年。太宗の治世は「貞観の治」と呼ばれ、善政を行ったことで評価されている。

*2 不能：あたはずと読み、できないの意。 *3 海内：世の中、世界。 *4 朕：皇帝の自分への尊称。

*5 相匡救：互いに正しく救う。 *6 憑直言鯁議：率直な意見と強固な議論。

問一 二重傍線部 a 「ならはし」を現代仮名遣い・平仮名で書き、b 「たふとみ」は読みを参考に本文中における意味として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えよ。

- ア 富を蓄えて イ 付き従えて ウ 行き倒れて エ 重宝して オ 出世して

問二 傍線部①「さらなり」はどのようなことを述べているか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えよ。

- ア 悪癖は改まらなからう。 イ 善人となるのは難しい。 ウ 守りを忘れるだろう。 エ 忌み避けるにちがいない。
- オ 悪の定めから免れない。

問三 傍線部②「そむきて、あらそふべからず」とあるが、その理由として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えよ。

ア 悪いことは自覚し記憶しづらいため、他者の支援は必ず受け入れるべきだから。

イ 相手はよかれと思つて提案しているのので、受け入れなければ気を悪くするから。

ウ 善い注意は家を保ち、逆は滅ぼすことにつながることは道理に適っているから。

エ 注意を受ける姿勢が悪ければ、今後注意を受けられず結果損をしてしまうから。

オ 身分の高い者が下の者をたしなめるのは当然であり、逆らうことは無益だから。

問四 傍線部③「善、これより大なるはなし」の内容に最も合致する語句を次のア～オから二つ選び、記号で答えよ。(順不同)

ア 他山の石 イ 忠言耳に逆らう ウ 人を呪わば穴二つ エ 良薬は口に苦し オ 坊主憎けりや袈裟まで憎い

問五 傍線部④「わづかなるくひものなど贈る」とあるが、この部分の役割(効果)として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えよ。

ア 程度の高いものを先に挙げ、後述の内容を肯定する。 イ 程度の軽いものを先に挙げ、後述の内容を否定する。

ウ 程度の低いものを先に挙げ、後述の内容を強調する。 エ 程度の重いものを先に挙げ、後述の内容を強調する。

オ 同程度の内容を対句的に述べることで印象を深める。

問六 傍線部⑤「正臣、事邪主亦不能致理」を本文中の返り点に従つて訓読する際、読む順番を表したものとして最も適当なものを

次のア～オから選び、記号で答えよ。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|----|---|----|----|
| ア | 1 | 2 | 6 | 4 | 5 | 3 | 10 | 9 | 8 | 7 |
| ウ | 1 | 2 | 6 | 5 | 4 | 4 | 3 | 8 | 7 | 10 |
| エ | 1 | 2 | 5 | 3 | 4 | 6 | 8 | 9 | 10 | 7 |
| オ | 1 | 2 | 5 | 3 | 4 | 6 | 10 | 9 | 8 | 7 |

問七 傍線部⑥「有同魚水」とはどういうことか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えよ。

- ア 主上と臣下が互いに正しくあるようと努めること。 イ 主上と臣下が親しむために意見を尊重し合うこと。
ウ 君主と家臣で民が暮らしやすい政治を行うこと。 エ 太宗にとって家臣は欠かせない存在だということ。
オ 侍臣にとって太宗は親しみのもてる君主だということ。

問八 Ⅰ・Ⅱの内容を踏まえて以下の問いに答えよ。

- 1 波線部A「よく家をたもつ」とあるが、Ⅲではどのようなことに当てはまるか。最も適当な部分を特定し、漢字のみ五字で答えよ。

2 波線部B「正主」とはどのような人物か、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えよ。

- ア 君主自ら諫言を勧める姿勢を示し、正しい臣下を求めることで、安らかな民の暮らしを実現しようとする人物。
イ 他者の意見や忠告を至上の喜びとし、善悪の判断を違えないよう恵みを施し、永く泰平の世を保ち続ける人物。
ウ 諫言を喜んで受入れ心に刻み、自ら善く生きることに努め、民に家族同様の慈しみの心を分け与えられる人物。
エ 身分や立場に関わらず、異なる考えの人の考えに耳を傾けて話し合い、平和な世を築くことに価値をおく人物。
オ 善政を行うために謙虚な姿勢をもち、異なる意見を広く集め助けとし、他国を破り国家の安定を重視する人物。

- 3 波線部C「邪臣」とはどのような人物だと考えられるか。人物像に合致する語句を次のア～キから二つ選び、記号で答えよ。
(順不同)

- ア 守銭奴 イ 不退転 ウ 門外漢 エ 付和雷同 オ 一衣帯水 カ 内柔外剛 キ 面従腹背

※問題は以上

